「太陽」

作　前川知大

■イントロダクション

二十一世紀初頭、世界的なバイオテロで拡散したウイルスで人口は激減し、政治経済は混乱、社会基盤が破壊された。数年後、感染者の中で奇跡的に回復した人々が存在することが明らかになる。彼らは免疫や代謝において人間をはるかに上回る身体に体質変化していた。若く健康な肉体を長く維持できる反面、紫外線に弱く太陽光の下では活動できないという欠点があったが、彼らは自分達の変異を、進化の過渡期にあると主張した。ホモ・サピエンス（知恵のある人）に対し自分達をホモ・ノクセンシス（夜に生きる人）と位置づけ、「ノクス」と名乗るようになる。変異は脳や精神面にも作用し、彼らは総じて頭脳明晰であり、進歩的な価値観を選択していた。ノクスへ体質変化する方法も解明された。しかしその適性は三十歳前後で失われることも分かった。政治的な混乱が続く中、ノクスは増え始めた。当初彼らは弾圧されたが、若者の夜への移行は歯止めが効かなくなる。徐々に政治経済の中心はノクスに移り、遂には人口も逆転してしまう。

ノクスの登場から四十年、普通の人間は三割ほどになり、ノクス社会に依存しながら共存している。かつて日本と呼ばれた列島には、ノクス自治区が点在し、緩やかな連合体を築いていた。都市に住むノクスに対し、人間は四国をあてがわれ多くが移住していたが、未だ故郷を離れず小さな集落で生活するものもいた。

かつてノクス殺傷事件を起こしたその集落（長野八区）は、隣接するノクス自治区から経済封鎖を受け続けていた。ほとんどの者が集落を離脱し、残った住人はわずか二十数人。その十年続いた村八分的な制裁が終わりを告げ、再びノクスとの交流が始まった。

■登場人物（年齢は目安、ノクスは年齢にかかわらず見た目は健康な三十歳くらい）

生田結（イクタユウ）……草一の娘。二十歳。
奥寺鉄彦（オクデラテツヒコ）……純子の息子。十八歳。
森繁富士太（モリシゲフジタ）……ノクス。見張り番。二十三歳。
生田草一（イクタソウイチ）……結の父。五十六歳。
奥寺純子（オクデラジュンコ）……鉄彦の母。克哉の姉。四十五歳。
曽我征治（ソガセイジ）……ノクス。玲子の夫。役所職員。六十二歳。
曽我玲子（ソガレイコ）……ノクス。結の母親。四十八歳。
金田洋次（カネダヨウジ）……ノクス。医師。草一と同郷で玲子の友人。五十六歳。
奥寺克哉（オクデラカツヤ）……純子の弟。事件を起こして失踪。四十二歳。

■1

十年前。山間の農村、長野八区。
農業用の広い作業所。早朝。
頭に袋を被せられ、Tシャツと下着、靴下だけの男が、手足を縛られ地面に横たわっている。それを見ている奥寺克哉がいる。
男は寒がり、もぞもぞと動く。克哉は腕時計を見る。外がうっすらと明るんでくるのが分かる。それを感じた男は怯え出す。
陽が昇る。窓から差し込む日光がじりじりと男に迫ってくる。
光が男の足先を照らすと、男は痛みを感じて足を引っ込め、怯え、混乱する。男は助けを乞うが、克哉は耳を貸さない。男は逃げようともがくが、諦め、大人しくなり、光に包まれる。男は太陽に焼かれ、死ぬ。

——時間経過。
同所。奥寺純子が来る。遺体の側で克哉が放心している。純子は焼けただれた遺体を見る。

克哉　姉ちゃん、姉ちゃんあの——
純子　誰？
克哉　……アイツだよ。
純子　どうして？　仲良かったんでしょ。なんでこんな……。どうしよ、どうしよ、これだけは、絶対に、絶対にやっちゃ駄目なんだよ。

——時間経過。
同所。生田草一が来る。草一と純子は遺体を毛布に包み、縄で縛る。克哉はただ見ている。二人は遺体を引きずって行こうとすると、遠くから生田結の声がする。

結　お父さん？　お父さーん。
草一　こっち来るな。結、こっち来ちゃ駄目だよ。家で待ってなさい。ね、直ぐ行くから。
結　じゃあ朝ご飯作ってあげるー。
草一　おお、頼んだ。
結　はーい。

草一は遺体を運んで行く。

——時間経過。
奥寺家。克哉のいる部屋に純子が来る。

克哉　誰？
純子　あっちの警察。あんたと話したいって。
克哉　え、そんな、やだよ。
純子　とりあえず、いないって帰ってもらった。２３時にまた来るって。それまでに何言うか決めないと。
克哉　おおぉ、アリバイだ。
純子　あんたが喋るんだからね、しっかりしてよ。
克哉　おお、大丈夫。大丈夫だって。

——時間経過。
同所。草一が来る。

草一　遺体が見付かった。太陽に焼かれたことは見れば分かる。大事になる。克哉君、自首してくれ。
克哉　え？　えええ。
草一　この村全体に迷惑がかかるんだよ。
克哉　えでも、俺絶対殺されるよね。
草一　いま自首すれば何とかなる。頼む。
克哉　バレないよ。
草一　バレなくても、村全体の責任になるんだよ。あっちで悪さしてんのは大抵この村の奴だ、今度こそ潰される。
克哉　死体隠そうって言ったの姉ちゃんだし、俺頼んでないし、共犯でしょ。

草一は克哉の腕をつかみ、引いて行こうとする。克哉は抵抗する。

克哉　やめてよ！　やだって！　はなしてよ！

克哉は草一を振り切る。

純子　あの、少し時間もらえますか。

草一は部屋を出る。純子は克哉の手をにぎる。

純子　克哉、お願い。
克哉　俺見捨てるのか？

克哉は部屋から出て行く。純子は追わない。

——時間経過。

同所。草一が来る。別の場所で克哉は鞄を持って逃げる。

草一　克哉君は？　どこ行った？　純子さん。

純子　……。

草一　外で警察待ってんだぞ。ノクスの連中、自首するなら悪いようにはしないと言ってる。

純子　それが、いないの。

草一　逃がしたのか？

純子　……警察には、私が話します。

——時間経過。

奥寺家。外から石が投げ込まれ、窓が割れる。外から怒号が聞こえる。投石は続き、怒号は大きくなる。パチパチと音がし、家が燃えはじめる。

草一　おい！　出ろ！　外出ろ！　あいつら火点けやがった！

騒音と怒号の中、草一と純子は火に囲まれる。暗転。

■2

1場から十年後。夜。

長野八区と隣接するノクス自治区、新都市松本の境界線になっている河川。そこにかかる橋のたもとに、小さな小屋が関所として建てられている。小屋の前は広場のように開けている。

純子と曽我征治が向かい合っている。征治の脇には森繁富士太がいる。

征治　まぁ、法律というのが残っていたら、なんですかね、あれか。時効。そうそう時効ですね。

純子　どうして今になって？

征治　ご遺族の意向です。彼らもこれ以上何かを望むこともないと言ってるし、そもそも疲れたんです、こういった状況に。怒りという感情は、そう長続きするものじゃありません。そんなもの抱えていたって、ポジティブじゃないでしょう、自分の人生を生きる上で。前に進まないと。十年、経ったんですよ。十年かかったというのかな、遺族の方にしたら。

純子　すいませんでした。
征治　万事手続きはこれからですが、えー本日を持ちまして、新都市松本と長野八区の、関係正常化、交易再開とします。

征治はＡ４の封筒を純子に渡す。純子は中をのぞく。

純子　これは、その、何を保障するものなんでしょうか？
征治　読んでいただければ分かります。まぁ、十年前の関係に、その頃に戻るということです。お互い状況はずいぶん変わりましたけど。
純子　そうですね。
征治　今、人口はどれくらいですか？
純子　やっと野球が出来るくらいです。
征治　それは九人、一八人？
純子　一チームじゃ野球はできないでしょ。
征治　そりゃそうだ。大変ですね。野球もままならない。野球、好きなんですか？
純子　いいえ。
征治　僕大好きです。しかし、そこまで減っていましたか。元はどれくらい？
純子　三百人くらいですかね。
征治　皆さん四国へ？
純子　分かりませんけど。
征治　うん。一番近いのはね、ここから北に約八十キロ、新潟に入ったあたりに千人程の集落があります。ご存知ですか？
純子　ええ。
征治　提案します。今の人数でしたら全員でそこへ引っ越すべきです。
純子　半分以上は七十過ぎの老人です。今更動きませんよ。
征治　よくこんな所で我慢してますね。
純子　ここが好きなんで。
征治　そうですか。分かりました。一人でも残るなら、僕達は支援します。当然です。遠慮はいりません。今、ライフラインの状況は？
純子　水だけは。
征治　電気、使ってください。よし、文明的な暮らしに戻りましょう。まずは生活物資の援助ですね。来週からはバスも通りますんで、夜の町で買い物ができますよ。
純子　はい。
征治　実は先ほど、車で一回りしてきました。十年の経済封鎖でここまでなるんですね、驚きました。鎖国状態でもそれなりに回っていると思ってた。酷いものだ、郷土愛というものが無いんですかね。まぁ元々、この長野八区は評判が悪かったんですよ。松本

で逮捕されるキュリオは、大体はここの住人だったそうです。実際ここが崩壊したおかげで、ウチの犯罪率下がりましたからね。ここでやり直そうと思うなら、どうかい街にしてください。

純子　はい。

征治　何か質問があれば。

純子　病院使いたいんですけど保険て――

征治　区役所の保険課に行ってください。窓口は日没から日の出の一時間前までなので、気をつけて。

純子　分かりました。

征治　最近はあなた方を診る医者も減ってきましてね。往診医の制度も復活しますから、そっちの方が便利かもしれませんね。週に一回ですが。

純子　あぁ。

征治　問題は老化でしょ。

純子　あ、まあ。

征治　大変ですね。交流再開されなかったらどうするつもりだったんです？　じっと待っていればどうにかなると思ったんですか？　時効を待つより、あなた達から何かするべきだったと思いますよ。復興にあたっては、そういう体質から直すべきです。自立する気があるなら援助は惜しみません。でもそうでないなら、いつまでたっても対等には話せませんよ。僕らはあなた方を応援したいんです。だから、頑張って。

純子は頷く。

征治　ん～。言葉には言葉で返して欲しいんだよな。頑張りますって。ね。

純子　……。

征治　ほら。言って。

純子　え？

征治　頑張りますって。

純子　あ、頑張ります。

征治　もっと元気に。やりなおすんでしょ。言葉が自分に力を与えるんですよ。もう一度。僕は口約束が欲しいんじゃない、あなたの意志が見たいんです。ほら。言って。

純子　頑張ります！

征治　よろしい。さて、では記念撮影といこう。（森繁に）カメラの準備を。

森繁はカメラの準備をする。

征治　奥寺さん、一枚いいですか？　広報誌に載せたいので。

純子　あ、はい。
征治　（森繁に）一発で決めてくれよ、苦手なんだ。

征治は右手を純子に差し出す。

純子　え？
征治　握手。
純子　ああ、はい。

征治、純子の手を取ると腰を低くして満面の笑みでカメラ目線。

征治　どうぞ。
森繁　はい、いきまーす。

カメラのフラッシュが光る。征治は光で頭痛に襲われる。

征治　おおぉ……。きくぅ。

征治は辛そうに目頭を押さえ、首を回している。

森繁　そんな苦手なんですか？
征治　カキ氷を十杯一気したみたいだよ。あぁそうだ、今度親善試合でもやりましょうよ。
純子　はい？
征治　野球。もちろんナイトゲームで。職場でチーム作ってるんですよ。
純子　あぁ（苦笑）
征治　じゃあ、行きますんで。今後ともよろしく。住人の名簿、早めに提出してくださいね。あそれと明日から夜は、彼が就くんで。
森繁　森繁といいます。よろしくお願いします。
征治　では。

征治と森繁は立ち去る。

純子　野球なんてやってないっつーの。

純子はハンカチを出して手を念入りに拭う。

■3

長野八区。昼。
奥寺家と、隣りの生田家を繋ぐ庭。純子と奥寺鉄彦、草一と結がいる。

鉄彦　学校には行ける？
純子　学校か、どうかな、時間かかるかもね。でもあっちに教科書とかは買いに行けるよ。
鉄彦　本はいいよ、学校に行きたいんだって。
純子　あんた学校は勉強するとこだからね。
結　純子さん、ここに残ることあります？　けじめがついたってことですよね。もういいんじゃないですか、解放ってことで。
純子　解放か。
結　責任果たしたと思いますよ。ここに残ることないと思いますけど。
草一　じゃお前どこ行くんだよ。
結　四国。
草一　またそれか。
結　だって四国には、ノクスに負けないくらいの街が出来てるんだって。大きな病院も大学もあるんだって。発電所ができて、もう完全に自立したって聞いたよ。
草一　誰から？
結　人。
草一　人ぉ？　人かほんとにそれ。あいつらは俺達を四国に押し込めておきたいんだよ。
結　四国に行きたい。
草一　お前どんくらい遠いか分かってんの？　すごいんだよ。ここでいいんだ、きっと住人も戻ってくる。
結　お父さん馬鹿？　戻って来るわけないじゃない。
草一　それならそれでいいよ。畑も果樹園も、正式にウチの土地にしちまえばいい。果物は売れるぞ、ノクスの野郎は果物大好きだからな、虫みたいな連中だよ。
純子　ちょっと、そういうこと言わないで。
草一　（笑）言いたいだけだよ。
純子　結ちゃん、あのね、ここに残る理由はあるのよ。（資料を見ている鉄彦に）鉄彦も聞いて。十年ぶりに、抽選も復活するの。
鉄彦　……え、それって、ノクスになれるの？
草一　抽選は年一回。三十歳未満の一％に、夜型になる権利が当たる。普通なら百人に一人の確率だぞ。でもここには今なんと、三十歳未満の奴が五人しかいない。その内の二人が、お前らだ。
鉄彦　……え？　てことは？
草一　（笑）えらい確率だぞ。

純子　残ってた甲斐があったね。
鉄彦　（笑）おおぉ、マジかぁ、すげぇよ、おおお。
純子　これは、ここで十年我慢したあんたらへのご褒美みたいなもんだね。
結　夜型になるかは、まだ決めてないです。
草一　これからは連中と会う機会も増える、感染したら元も子もないんだぞ。
結　向こうに頼らない生活すればいいよ。
草一　そうもいかないだろ実際は。
結　四国の例もあるし。
草一　そんな簡単じゃねぇよ。抽選出しとくからな。
結　ちょっと。
草一　権利があればワクチンを貰える。最悪感染しても抗体ができてれば、そのまま夜型になれるんだ。死ぬよりマシだろ。
純子　大きな町はほとんど夜型になってるわけだし、生活するにもそっちの方がいいのよ。
……（鉄彦の持つ資料を指し）それ、よく読んでおいてね。
鉄彦　これ何か難しいんだけど。
純子　あんたもう。
草一　おい結、読んでやれよ。
純子　ごめんねぇ。
結　いえ。（鉄彦の手から資料を取る）
純子　ちゃんと勉強してよ。
鉄彦　分かってるよ。
純子　それ後で回覧板と一緒に回すから、汚さないでね。
結　はい。

結は鉄彦の手から資料を取り、立ち去る。鉄彦は後を追う。

純子　結ちゃんのお母さん、向こうにいるんでしょ？
草一　あ、うん。多分ね。
純子　どうすんの？
草一　何が？
純子　何がじゃなくて。
草一　純子さんはどうすんだよ。これから。
純子　どうしよっか。解放とか言われても、村がこの状態じゃね。（笑）十年だって。そりゃ鉄彦も大きくなるわ。
草一　俺ももう、いいと思うよ。こだわらなくても。
純子　草一さんこそ、いいんだよ。もっと住みやすいとこ行っても。

草一　……行かないよ。

純子は立ち去り、草一はそのまま舞台に残る。
夜になり、関所の小屋に森繁が来て、準備している。

■4

関所前。夜。森繁が警杖を持って立っている。金田洋次が橋を渡ってくる。

金田　おはようございます。
森繁　おはようございます。ええと――
金田　私はこの長野八区の担当往診医に――
森繁　金田洋次先生ですね。
金田　その通り。
森繁　伺っております。どうぞお通り下さい。
金田　既に通っている。
森繁　車、シスタですか。
金田　エンジン音で分かるとは。
森繁　いいですよね、完全暗室。昼間走りました？
金田　ああ。メインカメラが壊れたら何も見えん。棺桶に早変わりだ。炎天下に三時間、車内温度は五十度を越えた。キュリオなら十回は死んでる。リコールすべきだ。
森繁　誰の話ですか。
金田　私の話だよ。自分の仕事に戻りたまえ、御機嫌よう。
森繁　本日の日の出は五時三十一分です。
金田　その通り。

金田は少し歩いたところで、草一と遭遇する。森繁は別空間とする。
草一と金田はお互いの姿を見て驚く。

草一　金田？
金田　生田草一か？

金田は抱擁しようと草一に寄っていくが、草一は逃げるように距離をとる。

金田　……。ずいぶんくたびれたな。
草一　歳相応だよ。
金田　ああ、これが老化か。別人のようだ。体型もずいぶん丸くなって――

草一　それは昔からだ。

金田　その通り。七年前に手紙を出したが返事がなかった。この村はあの事件で解散、もう地図から消えたと解釈していたんだよ。にしても、会えて良かった。

金田は再び抱擁しようと草一に寄っていくが、草一はまた逃げる。

金田は話しながらマスクと手袋を装着する。

金田　何しに来たと言いたそうだから言わせてもらう。私は往診医としてここに来た。自分で志願した。故郷の力になりたかったし、知り合いが残っている可能性があると思ったからだ。そしたら一番会いたかった友人に、最初に会うことが出来た。元気か、と声をかけたいところだが、目に見えてくたびれた君が目に入り、詰まるところくたびれたと言うほかはない。

草一　うるさいよ。

金田　だが敢えて言おう、元気か。

金田は握手を求めるように手を出す。

金田　これならいいだろ。

草一が少し歩み寄るのをみると、金田は一気に間を詰めて強引に抱き寄せる。草一は慌てて金田を押して離れる。

金田　伝染りはしないよ。

草一　歳なんでな、感染したらお終いだ。

金田　（服に着いたホコリを払う）ウィルスを怖がる前に、君は雑菌だらけだ。

草一　うるせえな、何しに来たんだよ。

金田　それは言った。服を新調しなさい。何年着てるんだ。巨大な雑巾を全身で絞っているような気分だったよ。生活が苦しいのか？　まぁそうだろうな。しかし何故こんな所に残った？　私は君が優秀な男だと知っている。どうしてこんな所で十年も無駄にした？　あるいは君がいながら何故村がこのようなことになっている？　正直君を見た時そのことが頭に浮かび、若干の失望を覚えた。もちろん私には計り知れない事情があるのだろう。責めるつもりはないんだ。ただここは一応、私の故郷でもあるんでね。

草一　……帰ってくれ。医者を変えてくれと申請する。

金田　どうして？　こんなに心配しているのに。

草一　お前馬鹿にしにきたのか？

金田　いいや。何でそんなこと言う？

草一　金田、見た目が全く変わってないことに本当に驚いた。でも、俺にもお前が別人にしか思えない。

金田　……そうか。うん。アプローチを間違ったかもしれん。修正するよ。そうか。何が不快だった？　いや、それはいい。今日は挨拶に来たんだ。奥寺純子さん、知ってるか？

草一　帰れと言ったんだ。

金田　往診医として来ている。君がどう思おうが仕事はさせてもらうよ。私は今昼の人間専門なんだ。安心していい。私ならこの村に貢献できる。老化に感心があってね。君達は実に興味深い。

草一　お前だってもとはこっち側じゃねぇか。なんだその言い草。ふざけんな。

草一は金田をおいて去る。金田はやむなく一人で村へ入っていく。

■5

関所前。森繁が椅子に腰掛け、雑誌を見ている。そこに懐中電灯を持った鉄彦が近付いて来る。立ち止まり、森繁の様子をうかがう。

森繁、鉄彦の存在に気付き一瞥。すぐに雑誌に視線を戻す。

鉄彦、じりじりと近付いて来る。森繁が見ると立ち止まる。その繰り返し。

森繁　何がしたいんだ！

鉄彦　うぅ……。

森繁　買い物ですか？　申請は出した？　もしそうならお名前を。ま今日はリスト来てないから違うと思うけど。あの、いきなり来たって駄目ですよ。僕は許可出せませんよ。勝手に町に入って、いじめられても知らないよ。……なんか喋れ。

鉄彦は鞄に手を入れ何か出そうとする。森繁は警杖を持って身構える。

森繁　おい。ちょっとやめとけよ。……なんだその中。答えろ。……おいなんだお前、喋れないのか？　喋れないなら、あれだ、あぁそうか耳が聴こえないなら無駄か、ちょっと動くな！

鉄彦　……俺は、喋れる。

森繁　おぉそうか、良かった良かった。言葉が分かるなら、言う通りにしてくれよ。な。その鞄は何だ？　地面に置け。

鉄彦は鞄の中から何かを取り出す。

森繁　おいちょっと！　（鉄彦の手には透明の袋に入った茶色い葉っぱ）それは何だ？

鉄彦　タバコだ。
森繁　タバコ？
鉄彦　タバコ。
森繁　大麻か？
鉄彦　違う。おいしいタバコだ。
森繁　タバコはやらん。しまえ。
鉄彦　じゃあ、これはどうだ？

鉄彦はもう一つのビニール袋を出す。似たような葉っぱ。

森繁　（目視する）タバコはやらんと言っている。
鉄彦　お茶だ。
森繁　お茶？
鉄彦　自家製の最高級品だ。一〇〇％新芽、いわゆるＦＯＰ、フラワリーオレンジペコーだ。もちろん無農薬有機栽培。
森繁　それが全部、ＦＯＰ。
鉄彦　そうだ。たまらんだろう。
森繁　たまらんな。
鉄彦　どうしたい？
森繁　あぁ、今直ぐ熱いお湯を沸かしたい。
鉄彦　それは自分で用意しろ。
森繁　ん、てことは？
鉄彦　やる。

鉄彦はお茶の袋を投げ渡す。森繁は受け取る。

森繁　おおぉ。袋の上からでも香りが。

鉄彦は森繁の動向を見守る。香りを楽しむ森繁。

鉄彦　どうだ？
森繁　いい匂いだ。
鉄彦　湯は沸かせるのか？　試してみろ。
森繁　今すぐ楽しみたいところだが、ここを空けるわけにはいかん。家に帰ってじっくり楽しもうと思うが、それでもいいか？
鉄彦　かまわん。

森繁は鉄彦の動向を見守る。

森繁　もし俺がお茶にうつつを抜かしている間にここを通ろうと思っていたなら、それは俺を甘く見すぎだ。もしお前が全裸の女だとしても、俺はここを動きはしないだろう。

鉄彦　俺は女ではないし、全裸でもない。

森繁　そうだ。要するに俺はここを動きはしないということだ。当てが外れたな、帰って良し。

鉄彦　帰らん。

森繁　お茶の感想が聞きたければまた明日来るがいい。ただし言っておくと、お前の言うことが真実なら、このお茶の感想は決まっている。おいしい。

終始、鉄彦は森繁から距離をとっている。話しながら思わず近づき、離れたり。

森繁　まだ何か用か？

鉄彦　お前は俺をぶたないのか？

森繁　なぜ？　美味しいお茶を貰ってぶつ奴がどこにいる。

鉄彦　お前の前の奴は俺をぶった。

森繁　なぜ？　お茶が嫌いだったのか？

鉄彦　好きだったようだ。

森繁　じゃあなぜ？

鉄彦　賄賂だと言った。

森繁　お前はお茶の見返りに、何か要求したのか？

鉄彦　いや、言う前にぶたれた。

森繁　じゃあそれは賄賂じゃない。彼はお前の好意に暴力で答えただけだ。悪いことは何もしていない。ただもし、これから俺に何か要求を出すのなら、そしてそれがこのお茶と引き換えというのなら、俺もお前をぶつかもしれん。

鉄彦　じゃあ俺は何も言えない。

森繁　言えないような内容なら、口から出る前にここを立ち去ったほうがいい。立ち去るのだとしても、お茶を返す気は無い。一度貰ったものは返さん主義だ。もし返せと言うのなら、それはお前自身が自らの中にある不当な要求の存在を、認めることにもなる。

鉄彦　不当な要求とはなんだ？

森繁　それはこのお茶を賄賂と認めざるを得ないものだ。それは俺の仕事に関するものであり、その範疇ではない場合、賄賂にはならない。

鉄彦　範疇？

森繁　つまり、お茶のお礼に今からモノマネをしろと要求した場合、それは賄賂とは言わな

い。ただの、お願いだ。
鉄彦　モノマネをしろ。
森繁　断る！　やるかやらないかは俺が決める。別問題だ。
鉄彦　……わかった。要求は簡単だ。
森繁　よし言ってみろ。ぶつときはぶつと言うから、ぶたれる前に逃げろ。
鉄彦　……俺は、ノクスの友達が欲しい。
森繁　友達？
鉄彦　それだけだ。
森繁　それは、なに、俺と友達になるってこと？
鉄彦　それだけだ。ぶつのか？
森繁　ぶたないよ。ぶったらそれ友達じゃないよね。……いいよ。友達なろうよ。
鉄彦　ほんとに？
森繁　いいよ、全然いいよ。
鉄彦　あ、うん、良かった。
森繁　おお。
鉄彦　あの、何する？
森繁　え？　いや、俺今仕事中だから。
鉄彦　遊んでるじゃん。
森繁　遊んでないよ。
鉄彦　普通に雑誌読んでるじゃん。
森繁　いいの。ここにいるのが仕事なんだから。
鉄彦　こんな暗いのに字読めるの？
森繁　全然読めるよ。
鉄彦　みんなそんな目いいの？
森繁　ノクスは夜型だからね。
鉄彦　へー。便利？
森繁　さあ。普通。
鉄彦　へー。
森繁　……星の等級って知ってる？
鉄彦　知らない。
森繁　星の明るさのことなんだけど、十等級って分かれてるのね、君達キュリオが肉眼で見えるのが一番明るい一から、四まで。俺たちは八まで見えるんだ。だから今俺たちが見てるこの星空は、実は全然違う。悪いけど、俺の目にはもうすごいよ、満天の星空なんだ。
鉄彦　へー。いいね。
森繁　……ほんとにそう思ってる？

鉄彦　今のままでも結構きれいだけどね。
森繁　ま俺は生まれた時からノクスだし、これしか知らないからね、比べるもんじゃないと思うけど。
鉄彦　もし俺がノクスになったら、今の空より綺麗って思うかな？
森繁　さあね。いっぱい見えるのは、美しさとは関係ない気がするよ。だって君達には、色があるんだろ。
鉄彦　色がないの？
森繁　無いわけじゃないけど、君達とは違うみたい。
鉄彦　へぇ。
森繁　キュリオからノクスになった人は驚くみたいだね。スペクトルが違うんだよ。
鉄彦　スペクトル？　お前頭いいの？
森繁　いや、残念ながら落ちこぼれだった。
鉄彦　ノクスのことや、いろんなこと教えてくれよ。
森繁　俺が知ってることならね。
鉄彦　助かるわ。
森繁　じゃ手始めにこれやるよ。（自分で読んでた雑誌）
鉄彦　なにそれ？
森繁　こっち来なよ。もっと。

鉄彦は躊躇する。

森繁　大丈夫だよ。そんな簡単に感染しないって。
鉄彦　ほんとに？
森繁　そうだよ。握手で伝染るとかデマだから。
鉄彦　そうなの？
森繁　いつの時代だよ。ほら。ほら。

鉄彦は雑誌を受け取り、開く。

鉄彦　え？　うわっ、うっわ、やっべえ。これエロ本じゃん、初めて見た。
森繁　（笑）違うよ、ただのファッション誌だよ。
鉄彦　え？　そうなの？
森繁　（笑）そうだよ。
鉄彦　そっか、そっか。はは。
森繁　ノクスの街のことも載ってるから。
鉄彦　おお。

森繁　次はエロ本持ってくるよ。
鉄彦　え？　え？
森繁　くくく……（笑）

いつの間にか結がいる。

結　何してるの、こんなところで。
鉄彦　いや、別に。
結　戻って。危ないから。
鉄彦　あ、うん。
森繁　危なくなんてありませんよ。
結　感染したら責任とれるんですか。
森繁　喋ってただけです。伝染りませんよ。
結　それも、返して。

鉄彦は拒む。

結　返して。

結は雑誌を奪い、地面に投げ置く。
結は鉄彦を連れて去る。森繁は二人を見送る。暗転。

■6

新都市松本。曽我家のマンションのリビング。曽我玲子と金田がいる。

金田　そうか。それは残念だったね。征治さんとのセックスで妊娠したのは何度目？
玲子　二回目。三年で二回。
金田　うーん。相性がいいとは言えないな。
玲子　そうなのよ。だから今回は本当にショックでね。
金田　その間、他の男ともしてるんだろ？
玲子　もちろん。そこでも何回か妊娠したけどね。育たなかった。
金田　数は撃っても当たらずか。
玲子　最近はしてる最中にね、「あれ、ひょっとしたら前にも？」とかお互い気付く有様よ。
金田　それは私もある。
玲子　上手い人ならそれもまぁいいかとか思うけど、下手な人に限ってそういうことになるのよ。カルテで管理してるならマッチングの時に分かると思うんだけど、あれは敢え

てなのかね。
金田　染色体情報入ってるから、敢えてだろうね。
玲子　お店変えようかしら。
金田　ところで君の言う上手い下手というのはどこがポイントなのかな？
玲子　対応力ね。セックスの技術を磨かないのは怠慢よ。
金田　対応力というのはつまり、個々人の趣味趣向に合わせた――
玲子　人並みの洞察力があれば出来るはずよ。僅かな時間で二人の物語を作ることが大切。プレイというのはそういうことでしょ。そこに物語がなければ、それは家畜の種付けと一緒よ。二人で物語を奏でた後はとても満足感を感じる。ノクスという種に貢献しているという誉れ？　まるで賛美歌が聞こえるようね。でも家畜みたいなセックスをした後は最悪。幻聴みたいにドナドナが聞こえてくる。
金田　なるほど。私には反省すべき点があるかもしれんな。
玲子　その点征治はとてもスマートなの。
金田　そうなのか。
玲子　優秀よ。
金田　ぃふーむ。
玲子　生活態度も問題なし。ちょっと真面目すぎるけどね。
金田　染色体の相性が悪いなら、残念なことだな。
玲子　パートナーとして満足してるから、養子でもいいんだけどね。
金田　なぁ玲子、今度私とセックスしないか？
玲子　いやよ、恥ずかしい。
金田　恥ずかしい、なぜ？
玲子　恥ずかしくないの？
金田　恥ずかしい部分もあるが、大丈夫だ。
玲子　大丈夫じゃないわよ。
金田　なぜだ？
玲子　あなたキュリオの頃から知っているのよお互い。いやよ気持ち悪い。
金田　気持ち悪い？　そうか。忌憚のない意見を聞いてみたかったのだが。
玲子　お昼は？　下にベジ専門のイタリアンができたの。どう？
金田　いや、もう済ませた。往診医をやってると夜が早くてね。
玲子　先に言ってよ。待ってたんだから。
金田　申し訳ない。
玲子　で話って？
金田　長野八区も担当することになった。そして先日、そこで生田草一に会った。
玲子　まだあそこに居たなんて。
金田　君の娘も一緒だ。これは君に伝えといた方がいいと思って。

玲子　ありがとう。結には会った？
金田　まだ会ってない。
玲子　草一は元気？
金田　全身にガタがきてる。とても同い年とは思えん。
玲子　キュリオってのはそういうものでしょ。
金田　老いた患者を診ることはあっても、老いていく様に付き合ったことはない。若い頃を知ってる分ショックだった。想像すれば分かることなのに。
玲子　可哀想ねキュリオってのは。でも駅地下で野菜売ってるお婆ちゃん、山梨から来たキュリオなんだけど、美しいなって思うこともあるのよ……。草一にも会ってみたいな。
金田　難しいぞ。怒らせてしまったよ。私達は大分感覚がズレてしまっている。
玲子　ちょっと行ってみようかしら。
金田　やめとけ。
玲子　結にだけでも。
金田　最後に会ったのは？
玲子　あの子が三歳の時。
金田　彼らは血縁をとても大切にする。今更君が登場するのは迷惑だよ。
玲子　別に親だって言いに行くわけじゃない。
金田　どうするんだ、顔とかやけに似てたら。
玲子　メガネしてく。
金田　どうするんだ向こうもメガネしてたら。
玲子　メガネ、取る。
金田　ばれるよ。
玲子　サングラス。
金田　ああ。いやそういう問題じゃない。
玲子　次に行く時は同席させてもらいます。
金田　分からん奴だ。断る。
玲子　では一人で行く。
金田　キュリオ地区でノクスの女が一人歩いてたら、どうなるか分かってるのか？
玲子　私は乱暴され、あなたは罪の意識に苦しむ。
金田　その通り。誰も得をしない。
玲子　お願い。
金田　なぜ？　今まで気にもしなかったんだろ。
玲子　そこにいると思ったら別よ。
金田　駄目です。
玲子　お願いします。
金田　……。では私とセックスしなさい。

玲子　セックスを交換条件に使うのはモラルに反すると思う。
金田　その通り。
玲子　恥を知りなさい。

金田は両手で顔を覆う。

玲子　可哀想に。苦しんでいるのね。
金田　その通り。

金田が苦しんでいると、征治が帰宅する。

玲子　おかえり。
征治　ただいま。（金田を指し）どうしたの？
金田　失礼。（立ち上がる）
征治　大丈夫？
金田　大丈夫です。今あなたの奥さんにセックスの申し入れをして断られたところです。
征治　そうでしたか。残念でしたね。
金田　今日はもう帰ります。
征治　それがいいでしょう。
金田　征治さん、あなたは相当な実力者だ。見習いたい。
征治　何がですか？
金田　いえ。では。
征治　金田君、一応言っておくと、僕は嫉妬があるほうなんだ。人類皆兄弟で構わないが、君は兄弟の前に金田洋次という名前が付いている。分かるよね？
金田　分かります。
征治　もちろん、子孫を残すのが責務ということも分かっています。
金田　その通り。

金田は立ち去る。玲子と征治は長い抱擁をする。

征治　乗り越えよう。僕達だけじゃない。
玲子　分かってる。
征治　七十二歳の人が産んだらしいよ。この数年で出生率も随分上がったみたいだし、僕達ノクスはこの問題を克服しつつある。
玲子　いいニュースね。
征治　僕達には、時間もある。

玲子　（笑顔）。養子もある、って勧められたけど病院で。
征治　根本的な問題の解決にはならないけど、子供のいる生活は魅力的だよね。
玲子　どう？　養子なんて。
征治　異論はないよ。でもめでたく子どもが産まれたら？
玲子　養子に出せばいい。
征治　そりゃそうだ。
玲子　三浦さんちも養子もらうの決まったみたい。
征治　へえ、どっち？
玲子　キュリオに決まってるでしょ。
征治　だろうね。何歳？
玲子　三歳。
征治　その歳で手術できるの？
玲子　体力によるみたい。
征治　まぁノクスになるなら早いに越したことはないな。
玲子　そうね。私ね、キュリオだった頃に子供を産んでるのよ。
征治　……一度聞いた。
玲子　その子、今も長野八区に居るって。金田が教えてくれたの。
征治　すぐそこじゃないか。
玲子　そうなのよ。
征治　今もキュリオなんだね。何歳？
玲子　ちょうど二十歳。どんな子になってると思う？
征治　男？
玲子　女。
征治　君に似てるかな？
玲子　（笑）
征治　遺伝より環境だよ。そもそもキュリオなわけだし。
玲子　そうね。でも養子のこと考えたらその子も候補に入れていいかと思ったのよ。二十歳なんてノクスになりたがる時期でしょう？
征治　血縁にこだわるなんて君らしくないね。それにもう大人じゃないか。その子である必然性がない。
玲子　興味を持ってしまったの。
征治　二十歳の、キュリオだよ。……恐らく君は、その子の中に、自分に関係するものを何も見つけることが出来ない。あったとしてもそれは、幻想だよ。自分で持ち込んだ型に無理矢理押しこみ、ぴったりだと喜ぶ。そういうのは悪趣味だ。
玲子　純粋な興味よ。あなたこそ、血縁にこだわっているんだわ。
征治　違う。一番の問題は年齢だ。当初の目的と違う。いや、僕も正直に言おう。全くこだ

わってないかと言えば嘘になる。だからその子の話はやめてくれ。その子に会うようなことは、やめて欲しい。

玲子　そこまで言うならそうするわ。

征治　ありがとう。

二人は抱擁する。

■7

長野八区。昼。奥寺家の庭。鉄彦と結が話しながら出てくる。

鉄彦　だって普通に出稼ぎ行ったりしたって聞いたよ。

結　誰から。

鉄彦　時枝のじいさん。そんな簡単に伝染んないんだよ。

結　あんたは小さかったから覚えてないかもしれないけど――

鉄彦　そんな変わんないだろ。握手で伝染るとか、デマだから。いつの時代だよ。結はさ、親父さんの言うこと真に受けすぎなんだよ。ノクス嫌いが感染してるよ。

結　あんたのお父さんだって、それで死んだんだから。

鉄彦　ノクスになりたかったんだよ。

結　ノクスになってどうするつもり？

鉄彦　都会に住んで、学校に行く。

結　漢字も読めないくせに。

鉄彦　若いままいられんだぜ？

結　（笑）若いって、あんたまだ子供じゃない。馬鹿じゃないの。まずは大人になったら。

鉄彦　お前だってすぐババアになんだよ。

結　うるせえよ。

鉄彦　結のお母さんだってノクスになったじゃん。

結　ちょっとマジで怒るよ。

鉄彦　病気もしないし力も強いし、目もすげぇいいんだぜ。最高じゃん。

結　太陽の下を歩けないんだよ。

鉄彦　それだけじゃん。キュリオの時代は終わったね。

結　……あんたそれ意味分かって言ってんの？

鉄彦　何が？

結　キュリオって。

鉄彦　いや、え、何であいつら俺達のことキュリオて言うの？

結　骨董品って意味よ、キュリオって。馬鹿にしてんのよ、差別用語。新聞にも載ってないでしょ。

鉄彦　……マジで。ムカつくね。
結　何にも知らないのね。馬鹿。何にも知らないくせに。
鉄彦　お前は何か知ってんのかよ。俺が馬鹿なのは、こんな村に閉じ込められてたからだ！

鉄彦は立ち去り、結は残される。夜になり、森繁が出勤してくる。

■8

関所前。夜。森繁が準備している。そこに金田と玲子が来る。

金田　おはようございます。
森繁　おはようございます。今日は往診日ではありませんが。
金田　その通り。プライベートです。
森繁　そちらの方は？
金田　気にしなくてよろしい。
森繁　気にするのが私の仕事です。
金田　そうか。私の娘、とでもしておこう。
森繁　しておこう、ということはつまり、娘ではない。
金田　鋭いな。仕事ができる。しかし規則に忠実ということが、常に美徳とは限らない。私は君に命令できる立場にないが、私の真意を理解するだけの機知を、君が持ち合わせていると信じている。
森繁　身分証を。
金田　杓子定規か。（玲子に）身分証を出せ。

玲子は身分証を森繁に見せる。

玲子　どうぞ。
森繁　ありがとうございます。
玲子　いいのよ。
金田　邪魔したね。
森繁　お気になさらず。

金田と玲子は森繁から離れる。森繁は別空間とする。
金田と玲子は、待っている結のところへ行く。

金田　お呼び立てしてすいません。
結　あ、いえ。

金田　実はね初対面ではないんだ。私は君のお父さんの古い友人でね、金田といいます。覚えてますか？
結　あぁ、すいません。
金田　君がまだこんな頃、五歳だったかな。お正月遊びに行ったらね、私にも年賀状ちょうだいってせがんだんだ、だから私はその場で君に年賀状を書いたんだよ。そしたらその年賀状のくじが当たっちゃって、君にとても感謝された。まぁ元々君の家にあった年賀状だったんだけど。覚えてる？
結　なんとなく、はい。
金田　それからだね、段々と治安が悪くなり、足が遠のいてしまった。……それがこの度、往診医として戻ってきたというわけです。
結　はあ。
金田　元気でしたか？
結　まあ。
金田　成長した。
結　あぁ。

結は金田達と距離を取っている。

金田　大丈夫ですよ。君は誤解している。そう簡単に伝染るもんじゃない。それに君は若いし、健康だ。心配ない。
結　……はい。
玲子　あなたはあまり喋らないのね。
結　え？
玲子　彼が労した言葉の半分も返していない。
結　あ、はあ。
玲子　ほら。どうして？
結　あ、あの、私は、ここはその、しばらく交流がなかったから、あまりあなた達に慣れてないというか、はい。
玲子　慣れるもなにも同じ人間なのよ。でも答えてくれてありがとう。よく分かったわ。言葉は贈り物よ、バランスが悪いのは失礼です。
金田　そんな言い方をするな。慣れてないのはお互い様だろ。失礼、こちらは……娘の、の、ノリコだ。
玲子　ノリコです。もうちょっとマシな名前にして欲しかったわ。
金田　昼の人間に興味があるというから、連れてきた。君のことを思い出してね。
玲子　良かったら少しお話しませんか？
金田　……どうかな？　迷惑じゃなければ。

結　別に、いいですけど。
玲子　ありがとう。
金田　良かった。ここだと人目に付く、車の中にしなさい。では私は、お父さんと話してくるよ。ごゆっくり。（行こうとする）
玲子　あぁ金田、車のキー。
金田　おお、そうか。（キーをポケットから出して渡す）どうぞ。それから、自分のお父さんを苗字で呼ぶ奴があるか。悪い癖だぞ。
玲子　失礼しました。お父さん。
金田　しっかり、頼みますよ。

金田は立ち去る。
玲子は結を観察するように見る。結は居心地が悪い。

結　夜なのに、サングラス。
玲子　ああ、目が良すぎて。（サングラスを取る）
結　太陽に縁がないのにサングラスって、何か皮肉ですよね。
玲子　じゃあこれあなたにあげる。

玲子はサングラスを差し出す。結は少し躊躇い、受け取る。

玲子　行きましょう。
結　ここでいいです。
玲子　どうして？
結　車の中はちょっと。
玲子　怖いの？
結　ちょっと。
玲子　そう。それかけてみて。
結　え？
玲子　サングラス。
結　あ、はい。（サングラスをかける）
玲子　あら、とても似合わない。（笑）
結　はは（苦笑）

玲子は結に近付き顔を見る。

玲子　お肌が荒れているのね。太陽のせいでしょ。

玲子は結の頬を触る。結はその手を払おうとするが、玲子は手を掴んで見る。

玲子　手も。傷の治りが遅いんだわ。

結　あの、放してもらえますか。（玲子の力が強く、動かせない）

玲子は放す。

結　人を物みたいに見ないでください。（腕をいたわる）

玲子　ごめんなさい。（腕を指し）大丈夫？

結　ええ。

玲子　でもあなた、とても魅力的よ。

結　いいですよ、そんな。

玲子　とても魅力的。なんというか、健康的ね。実際に健康なのは私達だけど。うーん。圧倒的に不健康なあなた達は、近くで見ると健康的。（嬉しそうに笑う）

結　あの、そんな面白いですか？

玲子　（笑）いいえ。でも何故か愉快で。

結　はあ……。あの、ノリコさんていくつなんですか？

玲子　そんな変わらないよ。

結　教えてくださいよ。

玲子　二十四です。

結　へー。干支は？

玲子　兎。どうして？

結　だって、見た目じゃ分かんないんでしょ。

玲子　本当は三十六歳だと思ってる？　それとも四十八歳？　私たちは年齢なんて気にしないし、外見で人を判断したりしない。大切なのは内面よ。もちろん外見を清潔に、美しくするのはマナーだけどね。

結は自分の格好が気になる。

玲子　B&Dというカフェがあるんだけど、知ってる？

結　いえ。

玲子　結構有名よ。

結　B&D。

玲子　私達にはブレックファスト、あなた達にはディナー。

結　ああ。

玲子　そういうコンセプトカフェ。お互いの誤解を解きましょう、というね。松本にも何店かあるわよ。行ってみたら。

結　ノリコさんはよく行くんですか？

玲子　いいえ。でもあなたを見たら行ってみたくなって、思い出したの。

結　そういうの、あるんですね。

玲子　ちなみに昼の人は格安だから、絶対お得よ。まぁ物乞いみたいのが入ってこないようにドレスコードがあるけどね。着る物だけはちゃんとして。

結　……はい。

間。

玲子　もういいわ。ありがとう。

玲子は握手しようと手を出す。結はその手を取って握手する。

玲子はそのままハグする。二人は離れる。

玲子　ありがとう。彼には車で待ってると伝えて。

結　あの、ノリコさんて……、私のお母さんですか？

玲子　そうよ。よく分かったわね。どうして分かったの？

結　分かんないけど。

玲子　分からないのに分かるなんて、すごいじゃない。あなた大したものよ。さすがね。……じゃあ。

玲子は車の方へ戻る。結はしばし呆然とする。

■9

関所前。森繁は警備中。

森繁は鉄彦に気付くと立ち上がる。二人でわざとらしく敬礼をする。

鉄彦　お勤め、ご苦労さんです。

森繁　ん！

鉄彦　ブツは、いかがでしたでしょうか。

森繁　ん！　それが……

鉄彦　それが？

森繁　なんだか薄かったであります。

鉄彦　抽出時間は？

森繁　三分。
鉄彦　三分でも薄いはずはない。
森繁　いや、妙に、薄かったであります。
鉄彦　おいおいおい、まさか、そのままいれたんじゃないよね？
森繁　え、そのままって？
鉄彦　だからブレンドした？
森繁　え？　してない。
鉄彦　馬鹿お前、素人か！　いいか、単体のＦＯＰ、チップってのはお茶としての味はそんなに無いんだよ。ＯＰとブレンドすると、すげぇまろやかになんの。チップだけで飲むやつがあるか、もったいない。がっかりしたよお前には！
森繁　……申し訳ない。
鉄彦　……いいオレンジペコー、持ってるか？
森繁　いや。
鉄彦　明日持ってくる。
森繁　ありがとう。
鉄彦　いいよ。
森繁　君は、お茶屋か？
鉄彦　十歳からお茶一筋だ。
森繁　すげえな。手に職だ。
鉄彦　まあな。ブレンドの比率は自分で試して、お気に入りを見つけるといいよ。
森繁　なるほど。じゃあ店で売ってるＦＯＰって？
鉄彦　あれはブレンド済み。ちなみに渡したのはゴールデンチップだから、正確にはＧＦＯＰ、ゴールデンフラワリーオレンジペコーだね。だからブレンドによっては最高級のＦＴＧＦＯＰ、ファインティッピーゴールデンフラワリーオレンジペコーが楽しめるってわけ。試しに俺がブレンドしたの持ってくるよ。五、二、二、一で、お湯の温度は九十度、抽出時間は三分三十秒がベストかな。
森繁　（笑）驚いた……。ファインティッピーゴールデンフラワリーオレンジペコーか。いいね。五、二、二、一の九十度、三分三十秒ね。今度は失敗しないよ。
鉄彦　……記憶力いいね。
森繁　そう？
鉄彦　紙に書こうかと思ったけど、必要ないか。
森繁　大丈夫。ここに入れた（頭を指す）。しっかし、いやまいったよ。君がお茶屋とはね。
鉄彦　なんで？
森繁　いや、なんか、すげーなと思って。手に職だよ。
鉄彦　そっちだってちゃんと仕事してんじゃん。
森繁　こんなの、誰でも出来る。君は違う。

鉄彦　そうなの？
森繁　そうだよ。家がお茶屋？
鉄彦　いや俺だけ。
森繁　そうなんだ。え、俺だけってなに？
鉄彦　茶畑が放置されてたからいただいたんだよ。
森繁　え？　自分で栽培してるの？
鉄彦　そうだよ。近所の爺さん婆さん使って。
森繁　マジで？　社長？
鉄彦　別に社長じゃないけど。
森繁　それ社長だよ。
鉄彦　そうなの？
森繁　え、畑の大きさは？
鉄彦　三ヘクタール。
森繁　ヘクタールとかよく分かんないし！
鉄彦　かなり広いよ。
森繁　なんてこった、君が社長だったなんて。くっそー、これから君のこと社長って呼ぶよ。
鉄彦　じゃあお前のこと門番って呼ぶよ。
森繁　……いや、それはやめよう。役職とか、やめよう。
鉄彦　社長と、門番。
森繁　やめてくれ。……え、今何歳？
鉄彦　お前は？
森繁　いや教えてよ。
鉄彦　だってノクスは見た目じゃわかんないんだろ？　なんかすげー年上だったら悪いし。
森繁　俺二十三。
鉄彦　俺十八。
森繁　やっぱ下だよな。
鉄彦　そんな変わんないね。
森繁　なんか俺なんかより、君の方がいろんなこと知ってそうだよ。
鉄彦　そんなことないって。小学校だってろくに出てねぇんだから。
森繁　あぁ、キュリオは大変だな。
鉄彦　キュリオって言うなよ。
森繁　なんで？
鉄彦　お前意味分かってんの？
森繁　昼型のことだろ？
鉄彦　違うよ、ノクスが勝手に言ってるだけなんだよ。
森繁　おぉ、そっか。

鉄彦　俺たちは自分のことキュリオなんて呼ばない。だから、やめろよ。
森繁　おお。わかった。

征治が来る。森繁は慌てて態度を改める。

征治　ちゃんと仕事していますか。
森繁　すいません。
征治　そこに停まっている車は、往診医のものだね？
森繁　はい。金田先生のものです。
征治　今日は往診日ではないと思うけど。
森繁　プライベートだとおっしゃっていました。
征治　うん。そうか。今どちらに？
森繁　存じ上げません。お連れの方は車に戻ったようです。
征治　連れというのは？
森繁　女性でした。
征治　うん。

征治は少し考え、車の方に踵を返す。

鉄彦　ちょっとさ、今の内にあれくれよ。
森繁　なに？
鉄彦　ほら。
森繁　なによ。
鉄彦　持ってくるって言っただろ。
森繁　（笑）何々？　え？
鉄彦　あれだって。あれ。うー、エロ本。

森繁は笑いながらエロ本を鉄彦に渡す。鉄彦はニヤけた顔でページをめくる。

森繁　（笑）君、顔がやばいよ。マジで。あははは。

草一と金田が来る。話を切上げた草一を、金田が追ってくるようなかたち。

草一　おい、うるせえな。何やってんだ。お、何隠した？　出せ？
鉄彦　あ、いや、違うんです。あ。（エロ本を草一に取られる）

草一はエロ本をパラパラとめくり、閉じる。かしこまる鉄彦を見る。

草一　いいよ。
鉄彦　いや。
草一　いいよ、別に怒りゃしねぇよ。
鉄彦　……ほんとに？
草一　俺はお前が、いやな目に会わないか心配なだけだ。
鉄彦　いやな目なんて会わないよ、こいつすげぇいい奴なんだよ。前のと大違い。
草一　じゃいいんだけどさ。
森繁　始めまして。森繁といいます。
草一　どうも。
森繁　（金田に）お連れの女性は車に戻りました。
金田　はい分かりました。あのな、草一、もう少しだけいいか。
草一　（金田を無視して森繁に）ええと、あそうだ、こいつ、抽選出したから、そっち行ったらよろしく頼むわ。
森繁　ホントかよ。
鉄彦　言おうと思ってたんだよ。
草一　こいつホント馬鹿だから、頼むわ。
森繁　いえいえ。彼なら上手くやっていけますよ。当たるといいな。
草一　倍率、最大で五倍だから、可能性あるよ。
森繁　五倍？
鉄彦　五倍。
森繁　すっげぇなそれ、聞いたことないよ。
鉄彦　ここに残ってたかいがあったよ。
森繁　あでも、茶畑どうすんだよ。
鉄彦　まだ分かんない。
草一　大丈夫だよ、これから人は増える。やる奴はいるだろ。
鉄彦　ていうかまだ分かんないしね、当たるか。
森繁　いやいや、五倍は奇跡だよ。
鉄彦　ははは。

征治が戻る。皆征治に気付いて声を止める。

征治　おーい。君は何をしに来てるんですか、ここに。遊んでんなよ。
森繁　すいません。
征治　（皆を見回し）なんだ、君は人気者なのか？　ん？　大したもんです。あのぉ、あん

まり彼に話しかけないでもらえますか？　一応仕事中なんで。

鉄彦　すいません。

征治　ね。

草一　別にいいだろ、雑談ぐらい。軍隊じゃないんだから。

征治　いやほら、いろいろ面倒なこともあるので。

草一　面倒なことってなんだよ。

征治　あるでしょう？　いろいろ。

草一　仲良くしましょう、なんていつも言ってんじゃねぇか、あんたら。え。仲良くしてんだよなぁ（鉄彦にふる）。

征治　業務に支障が出ますので。

草一　（笑）そんな、え？　暇なんだろお前も？

征治　……あのね、言葉遣い気をつけてくださいね。

草一　お前に言われたくないよ。挨拶もしないで。

征治　あなただってしなかったでしょう。

草一　ちいせえな。

征治　一つ言っておきますけど、見た目で判断しないでくださいね。僕これでも六十二なんですよ。多分あなたより歳上ですよね。別に年齢がどうこう言いたいんじゃないんです。そうやって外見で判断されてなめられるのが嫌なんです。正直年配の方はそういう人が多い。でもそれってなんですか？　大人じゃないですよね、外見が人を大人にするんですか？　歳取っても結局子供の人って多いですよね。多いんですよ、年輪なんてハッタリなんです、古いのは体だけじゃない、ここ（頭）が古いんです。だからキュリオって言われるんですよ。もっと大人になってください。

間。

征治　金田君、話があります。

征治は車の方へ歩き出す。金田も付いていく。

草一　お前も、用がないのにこんなとこ来るな。

草一はエロ本を投げつけ、帰る。鉄彦は森繁を気にしつつ、草一の後を追う。
森繁だけが残り、落胆する。時間経過する。
そこに結が通りかかる。森繁はそれに気付いて姿勢を正す。結は足を止める。

森繁　こんにちは。

結　……。

森繁　何か、御用でしょうか？　あ、もちろん用がなくても結構です。ここはあなた達の土地なんだから。……珍しいですね、こんな遅くに。まぁ僕らにはランチタイムですけど。……鉄彦のお友達ですよね？　あいつは、大したもんですね。お茶のことを隅々まで理解してる。職人ですよ。尊敬に値します。……（反応が無いのを見て）すいません、静かにします。

結　お茶以外のことは何も知りませんけどね。

森繁　それがいいのかもしれませんよ。職人や芸術家は、一流どころは今もキュリオです、あすいません。いや、すいません。

結　謝らないでください。

森繁　僕はいつも、あなた達の作品に驚かされてるんで。何と言うかその感性に。……すごいと思うんですよね。

結　いいですよそんな。ノクスになると、何が変わるんですか？

森繁　いや、なんだろ……

結　あなたは何歳でノクスになったの？

森繁　あ、僕は生まれつきなんです。生まれつきの、第一世代。だから、すいません、よく分かりません。……ノクスが嫌いですか？　僕は、あなた達が好きです。

結は森繁に背を向ける。暗転。

■10

曽我家。リビング。征治と金田がいる。

金田　最近じゃ、四国の名産品は人間の子供、なんて言われてる。笑えない冗談ですよ。

征治　酷いもんだな。

金田　買う者がいるからです。

征治　麻薬みたいに言うなよ。

金田　ビジネスにしてるのはこっちですから。

征治　養子に反対か？

金田　いいえ。

征治　出生率は順調に上がってきている。いずれ子供を買う必要も無くなる。

金田　そうあって欲しいものですね。

征治　紫外線対策に有効な酵素が見付かった、なんて記事もあった。解決できない問題はないよ。

金田　そこまで完璧ですかね私達は。

征治　分かってるよ。だからと言って泣き言を言う必要があるか？

金田　いや、すいません。古い友人に会って太陽が懐かしくなったのかもしれません。
征治　（笑）いや、うん。金田君、僕らは歳を取ったのかもしれないよ。
金田　それは？
征治　うん。僕たちの体は若い頃のままだ。でもここはどうなんだ？　脳細胞も元気なまま？
金田　もちろん、脳だって肉体の一部です。
征治　僕の頭は硬くなってないかな？
金田　（笑）そう思ってるうちは大丈夫ですよ。
征治　医学的にどうかって聞いてるんだよ。
金田　老化は無い。硬いかやわらかいかは性格の問題です。
征治　君はいくつでノクスになった？
金田　二十七です。
征治　意識は変わった？　どんな感じがした？
金田　そりゃ、すっきりしましたよ。憑き物が取れた感じというか、ええ。
征治　それは肉体の問題なの？　脳がフレッシュになった効果？
金田　肉体が変われば心も変わります。疲れた時はやる気が出ないのと同じですよ。
征治　僕は十五歳だった。目が覚めたら、もう全てが変わってたんだ。景色も人も、全てが違って見えた。若い頃特有の潔癖さが、戦っていた色んな問題や怒り、欲望。そういうものから自由になれたんだ。これはすごいことだと思ったよ。生まれつき人に理性があるのなら、僕は全てを理性でコントロールできると思った。思い通りにならなかった感情にも、冷静に向かい合えるようになった。僕は思い通りにならない自分自身というものの、完全な支配者になったと思ったんだ。
金田　それは全能感、みたいな。
征治　僕は若い頃の、青臭い理想を失うことが大人になることだとは思わない。それを単なる怒りとは違う形で持続して、向かい合うことが出来ると思ったんだ。挫折や、孤独になることだって怖くない。目の前に広がるうっそうとした森に、一人で切り込んでいく力強い肉体と、それに支えられた強い意志を感じた。君がなった頃とは時代が違うのかもしれない、でも、分かるだろ？
金田　……何が言いたいんですか？
征治　僕はね、キュリオに対する差別感情が抑えられない。
金田　……あなただけじゃありませんよ。

金田と征治はそのまま舞台に残る。

■11

関所前。夜明け前。森繁は警備中。
鉄彦が来る。きまりの悪そうな鉄彦を森繁は笑顔で受け入れる。

森繁　久しぶり。
鉄彦　おお、久しぶり。
森繁　元気？
鉄彦　元気元気。
森繁　早起きじゃん。
鉄彦　夜はなんか、出にくくてさ。
森繁　ああ。
鉄彦　なんか、うるさくてさ。面倒くせえよ。
森繁　ほんとだよ、面倒くせえよな。
鉄彦　ほんと面倒くせえ。
森繁　君結局、またエロ本――
鉄彦　そうなんだよ！
森繁　食いつきすぎだろ。
鉄彦　ははは……あ、ある？
森繁　何のことだ？
鉄彦　あぁ、ぁれだよ。
森繁　ん？　皆目わからない。

森繁は笑いながらエロ本を鉄彦に渡す。鉄彦は本を開き、見る。

鉄彦　森繁さ、あのぉ、あれだよ、やったことあんの？
森繁　ええ？　何が？
鉄彦　何がじゃねぇよ。
森繁　ボウリングのことか？
鉄彦　おお女とだよ。
森繁　（笑）うん。
鉄彦　えマジで！
森繁　あるよ。
鉄彦　マジで？
森繁　あるよ。
鉄彦　えええ？　そうなんだ。へー。
森繁　君は？
鉄彦　俺？　……。
森繁　そうか。
鉄彦　いつ？

森繁　十三の時かな。
鉄彦　ふざっけんじゃねーよ！　ふざけんじゃねぇ！　ふっ！　……ふざけんじゃねぇぞ！

鉄彦は当たり散らし、森繁は笑う。二人はそのまま舞台に残る。

■12

曽我家。征治と金田。10場の続き。

征治　三十年やってきた。キュリオと僕らは共存できると思って。でも今は、管理されるべきだと思っている。彼らは感情的すぎるし、駄目なんだよ、会話にならない。
金田　ん～。ノクスだって万能じゃない、心が折れる時だってあります。でもそうやって差別感情に怯えてるんだから、まだ冷静ですよ。ノクスの全能感は選民意識や、特権意識に向かいやすい。心配だったらカウンセリングを受けた方が。
征治　（ため息）そうだね。
金田　少し休んだらどうです。
征治　うん。まぁ玲子のこともあってね。
金田　すいませんでした。
征治　いや。うん。怒ってしまったよ。情けない。僕は血縁にこだわっていた。くそぉ～。僕も歳だな。色んなことが許せなくなってる。
金田　（笑）私もノクスになって、スーパーマンになった気がしました。体は疲れないし風邪もひかない、思考はクリアー。でもこっちにだって失ったものは沢山ある、完全じゃないんです。あれです、本でも読んだらいい。キュリオの芸術はいいですよ。太陽の下でしかかけない絵や小説がある。キュリオは体も心も弱い、でもその弱さがあの想像力の根っこなんです。
征治　……ありがとう。
金田　征治さん。
征治　ん？
金田　キュリオの子供をもらいなさい。
征治　（笑）無理だよ。僕は差別主義者なんだ。
金田　はは……。

二人は立ち去る。

■13

関所前。11場の続き。橋の上に荷物を持った奥寺克哉がいる。二人は克哉に気付かず騒いでいる。

克哉　おい。おい！　お前ひょっとして、鉄彦か？
鉄彦　……はい。誰？
克哉　お。伯父さんの顔忘れたか？　ん？
鉄彦　伯父さん？
克哉　そうだよ。（近づいてきて）お前、え、あ、でかくなったな、でかくなったぞこの野郎（笑）なんだおい、おお？　俺よりでかくなりやがったな、偉そうに。ろくなもん食ってねぇくせにでかく育つのは、馬鹿の証拠なんだよ。まぁでもいいか、元気そうだ。

克哉は笑顔で鉄彦を叩く。克哉は森繁を一瞥する。

克哉　何かモメてたようだけど。
森繁　あぁいえ、違うんです。
克哉　ウチの甥っ子が何か面倒起こしましたか？
森繁　いえいえ、全く。
克哉　まこんなとこ住んでたら世間知らずにもなりますぉ。どうか勘弁してつかあさい。
森繁　いや、ですからほんとに、違うんですって。

頭を下げる克哉に恐縮しつつ寄っていく森繁。
克哉は素早く慣れた手つきで森繁の手首に手錠をはめ、もう片方を鉄柱にはめる。
森繁は一瞬何をされたか分からない。

森繁　あれ、え？　これはぁ？
克哉　へへぇ。（鉄彦に）モメてたんだろ？
鉄彦　……え？
克哉　モメてたんだろ？　ん、どうした？
鉄彦　いや、違うよ。モメてない。
克哉　え、そうなの。この村もう解放されたんだろ。なんでこんな門番みたいのいるんだよ。
森繁　すいません、これ、外してもらえませんか？
克哉　何してんの？　監視？
森繁　そんなんじゃありませんよ。案内係みたいなものです。
克哉　ふーん。
森繁　松本からいらしたんですか？　念のため、身分証を確認させてもらいたいんですけど。

克哉は森繁から見えそうもない位置で身分証を見せる。

森繁　あぁ、ちょっと、見えないですね。すいません、これ、いいですか？
鉄彦　外してよ、ねえ。
克哉　んん……。
鉄彦　お願いだから。外して。友達なんだよ。
克哉　友達？　（森繁に）友達なの？
森繁　はい。
克哉　（鉄彦に）こいつと友達？
鉄彦　そうだよ。こいつは他のノクスとは違うんだよ。
克哉　いやいやいや、それは違うぞ。お前は騙されてる。馬鹿だなぁ。
鉄彦　何がだよ。
克哉　馬鹿にしてんだよ基本的に。お前馬鹿だから分かんないんだよ。
森繁　違います。
克哉　あれだろ、キュリオの友達がいます、とか言うとちょっと格好いいんだろ、お前らん中で、だろ？　そういうの聞いたことあるよ。ペットじゃねぇぞ馬鹿野郎。

克哉は森繁の警杖を奪う。

克哉　この村をこんな滅茶苦茶にしたのはこいつらなんだぞ。お前のんきな奴だな。

克哉は警杖で森繁をつつく。

森繁　違います。俺達は絶対にそんなことはしない。
克哉　騙されんなよ。ったく、口の減らねえ、奴らだよ――（威嚇するように出した警杖が森繁の顔に当たる）おお悪ぃ、当たっちまった。

森繁は出血した口元を押さえる。

克哉　おっと、あ、気をつけろ、血にはマジで気をつけろ。鉄彦、血は駄目だぞ、伝染るからな。うぅ危ねぇ。あ、エロ本じゃん。うおおぉエロ本発見。

克哉はエロ本を拾う。鉄彦は警杖を奪い、克哉に向かって構える。

克哉　なんだよお前。
森繁　鉄彦、いいよ、いいって、やめとこう、な。暴力は駄目だよ。
克哉　お、でたな、得意の話し合いで解決か。
森繁　あの、誤解してます。僕達はこの村を――

克哉　いいいいいよ。どうせお前らのいいように思わされるんだ。
森繁　分かりました。じゃあもう、はい、ご自由に。どこへでも行ってください。その前に、手錠外してもらえます？　殴ったことは事件にしませんから。
克哉　この期に及んで上から目線だよ。

克哉は腕時計を見る。

克哉　あら、日の出まで一時間ないね。頑張って。

克哉は荷物とエロ本を持って立ち去る。

鉄彦　おい！　外してけよ！　おい！　おい！　何だよあれ！　ふざけんじゃねーよ。

森繁は何度か手錠を引っ張るが、頑丈で壊れそうにない。

森繁　あぁくそ、いってぇ。駄目だこれ。
鉄彦　おいちょっと、どうすんだよ、やべぇよ。
森繁　落ち付け、落ち着け。
鉄彦　どうする？
森繁　何かペンチ的なもの、探してきて。
鉄彦　おお。
森繁　ちっちゃいの駄目だよ、ワイヤー切るようなやつ。
鉄彦　おお。
森繁　鉄彦。時間、あんまり無いからね。
鉄彦　分かった。大丈夫。
森繁　頼むよ。

鉄彦は走り去る。森繁は鉄柱に繋がれたまま。

■14

生田家。結がいる所に草一が駆けこんで来る。

草一　結！　結！　おお。おとと。まあ落ち着け。
結　落ち着いてるから。
草一　抽選結果が出た。今年はお前だ。
結　え？

草一は結に小さな封筒を渡す。中には折り畳まれた一枚の通知。

草一　良かったな。さっき純子のとこに届いたんだ。鉄彦にはまだ言わないでくれってさ。あいつぐずるから。

結　うん。

草一　どうした？

結　うん、あー、どうしようかな、いきなりだね、え、これ迷うね。

草一　お前まだ若いからな。でも笑ってられんのは今の内だ。早い奴は二十後半で適性失うんだから、いける内にいっといた方がいい。

結　お父さんは、大丈夫？

草一　あ？

結　私がいなくて。生活できるの？

草一　お前がガキん時は全部俺がやってたんだよ。

結　これから歳取って、色々きつくなるよ。

草一　まだまだ。

結　私は、残ってもいいと思ってる。

草一　お前なに言ってんの、バチ当たるよ。

結　そんなにノクスがいいの？

草一　そりゃそうだろ。

結　ノクスが嫌いなのに？

草一　お前は別だよ。

結　なにそれ。

草一　生活するならってことだろ。それに、俺はウイルスで死ぬ奴を何人も見てきた。ノクスになろうが、生きててくれた方がましだ。

結　お父さんあれでしょ、私追い出したいんでしょ。

草一　何でだよ。

結　そしたら純子さんと住めるもんね。

草一　お前、何言ってんの？

結　いいんだよ、純子さんと結婚しなよ、そしたら私も気兼ねなく出ていけるから。

草一　そんなんじゃない。

結　純子さんのこと好きなんでしょ？

草一　うるせえな！　子供には、健康でいい生活できる方を選ばせたい、ただそれだけだ。

二人は舞台上に残る。

■15

関所前。13場の続き。鉄柱に繋がれた森繁のところに、鉄彦と純子が来る。
鉈と傘を持っている。

森繁　（鉈を見て）おおい、なんだよそれ、怖ぇよ。
鉄彦　これしか無かった。
純子　ちょっと、え、何どういうこと？
森繁　ああすいません、ちょっと遊んでて。
鉄彦　いや、違うんだよ――
森繁　いいんだよ。
純子　鍵は？
森繁　それが見当たらなくて、うわあ！

鉄彦は鎖目掛けて鉈を振り下ろす。

森繁　お前、なんだよいきなり、危ねぇよ。言えよ一言。
鉄彦　ごめん。（再び振りかぶる）
森繁　待て待て待て。ちょ鉄彦、鎖切ろうとしてる？　それとも俺の手首落とそうとしてる？
鉄彦　鎖に決まってんだろ。
森繁　じゃあもっと丁寧にやろうよ。
鉄彦　おお。
純子　時間もないし、最悪手首落として逃れるしかないね。まぁあなた達丈夫だから。
森繁　いやいやいやそこまで丈夫じゃないです。

鉄彦は鎖に鉈を振り下ろすにいいポジションが見つからない。

純子　何やってんのもう、貸して。

純子は鉈を受け取り、作業にかかる。鉄彦は傘を開き、森繁の上にさす。

森繁　（傘を見て笑う）ありがたいけど、それじゃ無理だよ。
純子　あ、刃がかけちゃったわ。意外と頑固ね。
鉄彦　ちょっと早くしてよ！　明るくなってきてんじゃん。
純子　分かってるわよ。

鉄彦は朝日の登る方を見る。

鉄彦　早く！
純子　うるさい！
森繁　鉄彦、小屋ん中にシュラフがあるから取ってきて。
鉄彦　シェリフ？　シェリフって？
森繁　寝袋のこと。
鉄彦　おおお。
森繁　ゴーゴーゴー。

鉄彦は小屋に向かって走り去る。
純子が鎖を叩くカツンカツンという音が響く。

■16

生田家。結と草一。14場の続き。

結　このままじゃそんなに駄目？
草一　こんなとこ残っても、何の未来もねぇよ。
結　そう思ってんなら何で居るの？
草一　今更どこ行くんだ、どこも一緒だ。
結　純子さんがここに縛られてるのは分かる、でもお父さんは違うでしょ。
草一　俺だけどっか行けるか。
結　純子さんの為に残ってるなら、他に何かすることあるんじゃない？
草一　なんだよそれ。
結　分かんないよ。
草一　分かんねぇのに偉そうなこと言ってんじゃないよ。
結　別にノクスにならなくてもいい、でもこんなとこにいる必要もない。
草一　じゃあ好きなとこ行けよ。お前は自由なんだから。
結　お父さんも純子さんも自由なんだって。
草一　そんな簡単じゃないんだよ。
結　何がよ。
草一　そういうもんなんだよ。
結　そういうもんて何よ。いつもそうじゃん、そんなもん無いよ、簡単だよ、簡単だって。
草一　いらねぇなら鉄彦にでもあげちまえ。

草一は封筒を投げ、部屋を出て行く。結は封筒を拾い、立ち去る。

■17

関所前。森繁と純子。15場の続き。

純子　はあ。鎖切るならこれじゃ無かったわね。あの子慌てて何言ってるか分かんなくって。
森繁　すいません、なんか。
純子　いいえ。大丈夫だから。絶対何とかするからね。
森繁　はい。
純子　（必死に鎖を叩きながら）十年前を思い出すわ、まったく。

鉄彦が寝袋を持って戻る。

鉄彦　これか？
森繁　それだ！　よしよし、広げてくれ。

鉄彦は寝袋を広げ、森繁の方に持ってくる。

森繁　（純子に）すいません、やばそうなんでとりあえずこの中入ります。
純子　ああ、はい、そうね。

鉄彦と純子は森繁が寝袋に入るのを手伝う。森繁は鉄柱と繋がった片手だけを出して寝袋に収まる。

森繁　続きどうぞ。お願いします。
純子　はい。
森繁　（眩しそうに朝日の方を見て）くぁ～、無理かなこれは。

純子は必死に、更に力を込めて鎖を叩く。鉄彦は落ち着かない。

鉄彦　ああぁ、おぉい、何でだよ、くっそ、ああ。
森繁　あちちち。ああぁ……
純子　もう少し、もう少しだから。頑張って。
森繁　すいませんあの、ありがとうございます。ありがとうございます。あの、大丈夫なんで、それで、手首切り落としてください。
純子　え、ちょっと何言ってんの？
森繁　お願いします。太陽浴びるより、そっちの方がまだ治りが早いんで。
純子　え、でも。

森繁　お願いします。早く！
純子　……。
森繁　お願いします！　大丈夫、ノクスは丈夫ですから。

純子はできない。純子は鉄彦を見る。鉄彦は自分がやると言うように手ぬぐいで口を覆う。鉄彦は純子から鉈を奪い構えるが、ためらう。

森繁　やれよ！　早く！　やって！　大丈夫、やってくれ！

鉄彦は鉈を森繁の手首に振り下ろす。森繁は悲鳴をあげる。鉄彦は何度も鉈を振り下ろす。森繁の手首は切断され、森繁は腕を寝袋の中に収める。鉄彦は寝袋のファスナーを閉める。純子は残った手首を布切れに包む。
朝日が昇る。純子は鉄彦の体に着いた返り血を必死に拭く。

純子　あんた、傷口とか、無いよね、無いよね？

寝袋の中で森繁が息を整えるのが聞こえる。
草一と結が来る。鉄柱の下には血が残っている。

■18

同。朝日の中、純子と鉄彦、草一と結、寝袋に収まった森繁がいる。
克哉が現れる。皆、克哉に気付く。

克哉　ウチ、なんか無かったけど、引越したの？
草一　……お前、先に何か言うことあるだろ。
克哉　ご無沙汰しました。奥寺克哉、只今戻りました。
草一　違う。
克哉　すいませんでした。大変、ご迷惑をおかけしました。
純子　どうしたの、今頃。
克哉　え、いや新聞で見たんだよ、この村のこと。写真にほら、姉ちゃん写ってたから、おおまだいたんだって思ってさ、遥々来ちゃったよ。
草一　なんだお前その言い草。
克哉　いや、知らなかったんだよ、この村がどうなってんのか。全然情報入ってこなくてさ。俺も心配してたんだよ。経済封鎖されてたのも、その新聞で知ったのよ。
草一　知らないわけないだろ。
克哉　ほんとだって、ていうかなに？　そんな、なんか突っかかんないでよ。

草一は克哉に詰め寄る。克哉は警戒して離れる。

克哉　ちょちょ、え？（笑）そんなに？（笑）いや、本当に申し訳ないと思ってるんだよ。申し訳ない。この村がこうなったのも、全部俺のせいだよ。だから、こうして戻って来たんだよ。

草一　十年だぞ。え？

純子　戻ってきてどうするつもり？

克哉　え、そりゃ、何か力になれんじゃねぇかと思ってだよ。

草一　なれねぇよ、見りゃ分かんだろ、この村はもうとっくに駄目になってんだよ。お前のせいで。

克哉　お、親父は？

純子　死んだよ。

克哉　え、いつ？

純子　八年前。

克哉　何で？

純子　自殺。

克哉　ええ？　え、俺のせい？

純子　そうよ。

克哉　そうか。

草一　それだけのことをやったんだよ、お前は。

純子　遅かったね。さすがに、遅いよ。

克哉　いや、俺も大変だったんだよ。

草一　自分でまいた種だろ。

克哉　見つかったら絶対殺されてた、だから心配だったけど、戻って来れなかったんだよ。

草一　残された奴がどれだけ辛い思いしたのか分かってんのか？

克哉　分かってるよ。

草一　分かってねぇよ。

克哉　別にここに残ることなかっただろ、四国にでも行きゃよかったんだ。

草一　あのな、お前分かんねぇか？　住人が一人でも残ってる以上、純子さんはどこにも行けないんだ、お前が逃げた責任は全部純子さんとこ来てるんだよ、そういう社会なんだここは。お前は俺たちの十年を台無しにしたんだよ。

克哉　俺たちって、草一さんに頼んだ覚えないんだけど。

草一は克哉に詰め寄るが、結の声で止まる。

結　お父さん。やめて。

克哉　まぁでも閉じこもってただけあって、考え方が古いよ。姉ちゃんもこんな、馬鹿正直に十年も反省することなかったんだよ。俺たちは太陽の下を自由に歩けるんだ、ノクスの奴らは追ってこねぇよ。俺から言わせれば十年も、村がこんなんなるまでなんで黙ってんだよ。ノクスのやりたい放題じゃねぇか。情けねぇ。やり返してやれよ、昼間に行けば楽勝だよ。畑のスイカ盗むより簡単だ。

純子　あんた、何しに帰ってきたの？

克哉　この村を解放しに？　戦い方を教えてやるよ。

森繁　……（寝袋の中から）僕たちは戦いませんよ！

克哉は声の主に気付き、寝袋を見て笑う。

克哉　あら、あらら、（笑）何だお前、さっきの奴か？　（笑）

鉄彦　うわあああ！

鉄彦は森繁の警杖で克哉に襲いかかる。克哉は既のところでかわす。

克哉　危ねぇなこの野郎ぉ。

克哉は警杖を構える鉄彦に対峙する。鉄彦は克哉に詰め寄ろうとする。そこに結が割って入り、鉄彦を止め、克哉に向き合う。

結　この村をボロボロにしたのはノクスじゃないですよ。

克哉　あ？

結　キュリオです。

克哉　お前、自分でキュリオとか言っちゃいけないよ。

結　あなたみたいな人がいるから、キュリオなんて呼ばれるんですよ！　あなたの家を焼いたのもキュリオですよ。犯人探しして、バラバラになって、勝手にボロボロになったんです。ノクスは何もしてない。

草一　うるせえ！

結　あなたみたいに馬鹿な、私たちキュリオが、この村をこんなことにしたんです！

克哉　だからなんだよ。あ。だからなんだよ。お前我慢できんのか、え？　なんでこいつらばっかいい生活してんだよ。

鉄彦　うわあ！　（克哉に襲いかかろうとするが結が止める）

結　鉄彦、やめて。この人と一緒になっちゃう。

森繁　（寝袋の中から）そうだよ、鉄彦、駄目だぞ！

克哉　（笑）んだよこれ、（笑）駄目だ、笑っちまう。
鉄彦　笑ってんじゃねーよ！　森繁にこんなことしたのは、こいつなんだよ。
純子　（克哉に）そうなの？
鉄彦　そうだよ！
森繁　いいんだよ。
鉄彦　よくねぇよ。
純子　ほんとに？
鉄彦　そうだって、こいつだよ！　こいつなんだよ！

純子は克哉を見る。克哉は悪びれない。

克哉　なんだよ。あ？　（森繁を指し）どうってことねぇよ。
鉄彦　ふざけんじゃねーぞ。

克哉は鉄彦を鼻で笑う。草一は克哉の背後に回りこみ、鉄彦と挟むように位置に立つ。

草一　お前、何にも変わってねぇな。
結　お父さん、やめて。鉄彦も。ちょ、純子さん止めてよ。

結は襲いかかろうとする鉄彦を押さえる。

鉄彦　（純子に）いいよね？　（結を振り払い）いいよね！

皆純子の裁定を待つ。純子は首を縦に振る。
鉄彦が克哉に襲いかかり、戦いが始まる。止めようとする結を草一が押え込む。

鉄彦　うわあああ！
結　放して！
草一　いいんだよ、これでいいんだ！

鉄彦は警杖で克哉を打つが、反撃もされる。戦い慣れた克哉に鉄彦は押されぎみになる。草一も加勢し、二人で克哉を殴る蹴る。結は暴力を止めようと純子にすがるが、純子は動かない。

結　やめて！　お願い、お父さん！　止めてよ、純子さん！　なんで、これじゃおんなじ

だよ、あの時とおんなじじゃない！　これじゃ駄目なんだよ、やめて！

純子は動かない。結の叫びに誰も耳をかさない。
ボロボロになって逃げようとする克哉は森繁の手首を切った血溜まりで滑り、血を浴びる。鉄柱に血だらけの手錠を見た克哉は、それが森繁の血だと理解する。
皆も事態の深刻さを理解する。

克哉　あ？　ああ？　んだよこれ？　嘘だろアイツの血か？　きったねえ、うわ、きったねえ！　はっはっはっ（手や顔に付いた血を必死に拭う）、やべえ、やべえよ。（すがるように純子を見て）助けてくれよ、姉ちゃん。

草一は純子を克哉から引き離す。克哉はウイルスに感染し、咳き込み始める。すぐに激しい痛みを感じ、叫びながらのたうち回る。

克哉　うわあああああああ！
純子　克哉！　克哉！

草一は純子を押え込む。克哉は激しく暴れ、息絶える。純子は克哉の遺体の前で座り込む。

草一　純子さん、今までよくやった。もう何をしようと文句言う奴はいねぇよ。もういいんだ、一緒に村を出よう。ここに縛られることねぇんだ。

純子は泣く。暗転。

■19

曽我家。征治と玲子がいる。別室に結がいる。

玲子　僅か数分の会話で私を母だと見抜いたのよ。すごいと思わない？　やっぱり彼らが言うように、血縁というのは神秘的ね。
征治　ポイントはどこだったの？
玲子　理由が無いのよ。ただそう思ったんだって。インスピレーションね。
征治　すごいな。君は？　どうだったの？
玲子　そもそも私はインスピレーションを期待して会いに行ったの。でも驚いたことに、何も感じなかった。見事に、何も。幻想だったのね、あなたの言う通りだったわ。目の前にいるのはただのキュリオの女、それもみすぼらしい、とても衛生的とはいえない。

征治　それが娘であることに失望した？
玲子　いいえ。魅力的と思ったわ。魅力的と思わない？
征治　ああ、思ったよ。
玲子　……。魅力的なのよ。

玲子は別室に行き、結に話しかける。征治は入り口で見ている。

玲子　ずっといてもいいのよ。
結　いえ、そんな。すいません。
玲子　私が申請すれば、直ぐにでもノクスになれるのよ。血縁関係は事実なんだから。
結　あ、いや、まだそこまで考えてないというか。
玲子　キュリオにはうんざりなんでしょ。
結　それに、そんな直ぐ、あなたを母親とは……
玲子　直ぐに気にならなくなる。人を愛するのに条件なんていらないのよ。
征治　ノクスになれば、君も実感するよ。
玲子　あなた達は血縁にこだわり、自分の家族を守る為には人をも殺す。でも私達は違う。全ての人間は家族よ。絶対に攻撃なんてしない。迷うことないと思うけど。
結　はい、でも。すいません。
征治　君は腹を立てているんだろ。良く生きたいと思っても上手くいかない。理由は例外なく、弱さだ。
玲子　強くなりなさい。
征治　そうすれば問題に立ち向かえる。自分の弱さを抱きしめ、強い者を悪とするのは大きな間違いだ。太陽に背を向けてでも、強くなる必要がある。

三人はそのまま舞台上に残る。

■20

関所前。森繁がいる。鉄彦が出てくる。

鉄彦　手、大丈夫？
森繁　うん、なんとかね。指はまだ、ほとんど動かないんだけど。
鉄彦　ごめんな。
森繁　気にするなって。……にしても、涼しくなってきたねぇ。
鉄彦　うん。
森繁　まぁ俺たちには、夜が長くなっていいけど。
鉄彦　世界には一日にちょっとしか太陽が出ない場所があるらしいね。

森繁　ああ北欧とかの方ね。
鉄彦　行ったことある？
森繁　無いよ。だって物凄え遠いんだよ。
鉄彦　沖縄よりも？
森繁　百倍遠いね。遠いし、寒い。
鉄彦　へえ。寒いのと暑いの、どっちが好き？
森繁　寒いの。君は？
鉄彦　普通なのが好き。
森繁　今くらい？
鉄彦　うん。
森繁　その選択肢無かったよね。
鉄彦　なにが？
森繁　まいいけど。君、車の運転できる？
鉄彦　できるよ。
森繁　いいねえ。
鉄彦　免許無いけど。
森繁　今度の連休、どっか行かない？
鉄彦　どこに？
森繁　どこでもいいよ。とにかく遠いところ。この辺から出たこと無いんだろ？　夜は俺が運転する。昼間は君。ルマン並にノンストップ。行けるところまで行くんだ。地図とにらめっこするのも楽しいもんだよ。
鉄彦　でも車の中、日入るよ。
森繁　新しい寝袋買ったんだ。完全ＵＶカットの棺桶みたいなやつ。
鉄彦　死体運んでるみたいでやだなぁ。
森繁　ちょっとでも開けたら俺は大怪我。君を信用しての作戦だ。
鉄彦　はあ。
森繁　どう？　面白くない？　そんな風にノクスとキュリオのコンビで旅してる奴いないぜ。
鉄彦　旅かぁ……。
森繁　あんまり乗り気じゃない？
鉄彦　いや、別に……。
森繁　どうした？　元気ないじゃん。
鉄彦　いやぁ～。それがさ。……駄目だった、抽選。外れちまった。
森繁　そっか。
鉄彦　くっそぉ。絶対いけると思ったのに。
森繁　ま確立高いとはいえ、抽選だからね。
鉄彦　ちくしょう。

森繁　まだまだチャンスあるんだから。
鉄彦　そうなんだけどさ。また一年待つかと思うとね。
森繁　いいじゃんいいじゃん。
鉄彦　良くないよ。
森繁　今のうちに太陽を満喫しろよ。
鉄彦　俺は早く学校に行きたいんだよ。色んなことを知りたい。
森繁　君は俺なんかよりずっと物知りだよ。
鉄彦　だからそうじゃないんだよ。
森繁　学校で教わることなんて大したことないよ、本当の知識は生活の中に転がってる。学校に行ったら分かる。
鉄彦　じゃあ俺はそれを知るためにも学校に行くんだ。お前は学校に行ってるからそんな風に言えるんだよ。
森繁　学校なんてくだらないよ。学校にあるのは知識だけ、本当に大事なのは知恵なんだよ。君はそれを持ってる。
鉄彦　まただよ。そんな風に言えるのはお前が学校を出たからなんだ。お前はよく俺を褒めるけど、俺全然嬉しくないよ。だって俺はお前が何を褒めてんのか、よく分かってねぇんだから。
森繁　君は素晴らしいものを持ってるんだよ。
鉄彦　俺が素晴らしいなら、なんで俺は幸せじゃないんだ？　なんで俺はこんなにノクスに憧れるんだよ？
森繁　……分かった。じゃあ君は学校に行って、きっと自分の素晴らしさを発見するよ。俺はただ、焦ることないって言いたいんだ。確かにノクスは老いや病から開放された。でも太陽という、世界の一番根っこの部分に見放されてるんだ。君たちは昼も夜も楽しむことが出来る。俺たちからするとそれだけですごいことなんだ。だからもっと今の生活を楽しめよ。
鉄彦　こんな狭苦しいとこやなんだよ。
森繁　君は二十四時間動けるんだ、どこにだって行けるんだよ。なあ、だから旅行こうぜ。俺たち二人なら二十四時間フル稼働の、最強コンビだ。ノクスとキュリオは干渉し合わない方がいいなんて言われるけど俺はそう思わない。お互いの足りない部分を補える最強コンビなんだ。仕事も辞めて、これから二人で全国旅して回るんだ、差別撤廃をアピールしながらさ、きっとスポンサーも付くぞ。どうだよ！　面白いだろ？
鉄彦　……キュリオって言うな。
森繁　呼び方なんてどうだっていいだろ、そうやっていじけるから駄目なんだよ。俺はノクス代表、君はキュリオ代表になるんだよ。骨董品の価値を上げるんだ自分自身で。

森繁と鉄彦はそのまま舞台上に残る。

■21

曽我家。征治、玲子、結。19の続き。

結　私にはまだ、あなた達の言っていることがよく分かりません。

玲子　そう。まぁしょうがないわね。それこそがキュリオの症状なんだから。インスピレーションがそう告げているんでしょ？　なんとなく嫌って。

結　症状ってなんですか。

玲子　論理的に考えれば分かることを、受け入れられないのがキュリオのキュリオたる所以よ。だから今私の言うことが理解できなくてもかまわない。ノクスになったら全て分かることだから。

結　それじゃいつまで経っても理解できないってこと？

征治　骨董品でいる限りね。

結　馬鹿にしないでください！

征治　ほらそれだよ。直ぐ被害者になる。

玲子　ノクスになれば理解できる。自分がどれだけ不合理な思い込みで満たされていたか。笑っちゃうわよ。

結　信じられない。

玲子　そういうものよ。

結　……私は、決める前に一度、四国に行ってみたい。四国はノクスに負けないくらい、ちゃんとしてるって聞いたんです。人も、社会も。だから、お金貸してもらえますか、絶対返しますから。四国を見て決めたいんです。

征治　……四国か。いや、旅費を出すのは問題ない。でも、お勧めしないよ。

結　どうして？

征治　二ヶ月前視察に行ったんだ。多分君は、失望するよ。……一応政府はある。でもほぼ独裁で、古臭い権力構造、格差も酷いし、街は汚れている。おまけにノクスに対する差別教育をしてる。人口の流出を食い止めたいのは分かるけど、酷いよ。

結　嘘でしょ？

征治　嘘じゃない。僕も心底、失望したよ。それでも行くかい？

結はその場に崩れ落ちる。征治と玲子は立ち去る。

■22

関所前。森繁と鉄彦。20の続き。

森繁　俺さ、なんでこの仕事選んだかって言うと、キュリオのこともっと知りたかったんだ

よ。実際のところ、キュリオと仲良くすることを嫌がる人もいるんだ。ノクスはクレバーだなんて言われるけど、みんな根っこには差別感情があるよ。

鉄彦　もし俺がノクスになったら、差別するかな？

森繁　分からない。

鉄彦　お前はどうなんだ？

森繁　俺は無い。だからこうやって君と居る。なにも変わらないんだ。

鉄彦　変わるよ。

森繁　変わらない。

鉄彦　全然違う。

森繁　違わないよ。

鉄彦　俺は、お前がなんでそう言うのか分からない。だって明らかに違うんだから。違うのに違わないなんて言うのはおかしいよ。

森繁　本質は同じなんだ。

鉄彦　本質ってなんだよ？

森繁　同じ人間だってことだよ。

鉄彦　だから同じじゃないんだよ。前にも言ったよな本質って、俺は考えたけど本質なんてもんはどこにも無かった、お前はその言葉で誤魔化してる。俺が言葉を知らないと思って誤魔化してるんだ。

森繁　誤魔化してなんかない。じゃあいいよ、違うとしてもそれはどっちが優れてるなんてことは無いんだ。

鉄彦　優れてるじゃないか、じゃあなんでみんなノクスになりたがるんだよ。お前らだってキュリオとか言って馬鹿にしてんじゃねぇかよ。

森繁　確かにそういう奴もいる、だから俺はもっとキュリオの良さをノクスに分かってもらいたいんだ。

鉄彦　全然良くないよこんなの。

森繁　素晴らしいよ。動物も植物も水や風も、全部太陽の下が一番美しいんだ、俺は映像でしかそれを知らない。でもそんな世界に住んでるキュリオを素晴らしいと思ってる。

鉄彦　いい面しか見てないんだよ。

森繁　お前だってノクスのいい面しか見てないだろ。俺はお前がノクスになるのも反対だったんだ。キュリオの数はどんどん減ってる。キュリオの文化は残すべきなんだ、俺はキュリオを守りたいんだ。

鉄彦　馬鹿じゃねーの！　そんなの学校の話と同じじゃねーか。そんなの自分がノクスだから言えんだよ。お前は俺のことを見下してるんだ。学校なんて下らない、ノクスなんて大したことない、そんなこと言えるのは自分が全部持ってるからじゃねーか！　お前は知識も強い体も独り占めしたいだけなんだ。俺はこんな小さな世界から早く出たいんだよ、病気もやだし、年取るのもやなんだよ！　俺は早くノクスになりたいんだ！

間。

鉄彦　キュリオを守りたいだなんて、そんなのずるいよ。結局、お前も差別してるんだ。

森繁　違う。

鉄彦　違わない。

森繁は鉄彦の頬を叩く。再び叩く。

鉄彦はやり返そうとするが片手の森繁にかなわない。

森繁　お前が弱いのは、お前の責任だよ。

鉄彦は森繁に向かっていくが、やり返される。叫びながらがむしゃらに、何度も何度も森繁に向かっていくが、全くかなわない。鉄彦は地面に倒れる。

森繁　そんなのな、ノクスになったって解決しないよ。

鉄彦は駄々をこねるように泣く。森繁は立ち去る。

■23

病院の一室。金田と征治と玲子が入ってくる。別室には結がいる。

金田は持っていた鞄を置く。

金田　草一の承諾、確認したいんだけど。

玲子は草一のサインが入った書類を金田に渡す。金田は確認する。

金田　征治さん、あの子である必要ありますか？

征治　玲子の子だよ。普通の成り行きだろう。

金田　いや、あなたはその事実に苦しんでいた。

征治　そうだね。……うん。だからだよ。乗り越える必要があると思った。彼女を受け入れることが、自分の成長に繋がると思ったんだ。

金田　それは、あの子に関係の無いことです。

征治　そうだね。

金田　そうです。

征治　ん？　それが？

金田　そんなことにあの子を利用するべきじゃない。
征治　どうして？　お互いに利益がある。
金田　（玲子に）君も、あの子に何も感じなかったんだろ。
玲子　そうね。
金田　血縁にこだわる必要あるか？
玲子　こだわってないわよ、だから彼女を避ける理由もないでしょ。これは、縁。
金田　そうかもしれないけど。
玲子　彼女が望んでいるのよ。なに？　あなた反対なの？
金田　そういうわけじゃないが。
玲子　じゃあ何？
金田　あの子の幼い頃を知ってる。
玲子　私より知ってるって言いたいの？
征治　こだわっているのは君じゃないのか。
金田　……ええ、はい。反対です。
征治　どうして？
金田　分かりません。
玲子　（笑）分からないってことないでしょ。
征治　彼女は苦しんでいるんだ。キュリオであることに。
玲子　助けてあげたいのよ。
征治　愚かさが罪だと言いたくはないが、現実的には限りなく犯罪的だ。彼女はそれに気付いてる。
金田　それは、彼らの問題です。
玲子　あなた残酷ね。そんな場所に彼女をおいて平気なの？
金田　それは、彼らが自分で乗り越える問題なんです。
征治　乗り越えたのが僕らだよ。金田君、今更何を言ってるんだ？

間。

金田　その通り。
征治　彼女を救ってあげないと。
玲子　キュリオは病気よ、薬で治るんだから。

金田は別室に行き、結を見る。

金田　どうして自分から太陽を捨てようとする？　それこそがキュリオの症状だよ。

語気を荒らげた金田を、追ってきた征治と玲子が見る。

征治　立会人は、他の医師に頼んだほうがいいかな？

金田　（結に）本当にいいんだね？

結　はい。

金田　……。

征治　第三者の君が反対しても、何の強制力もないよ。

金田　その通り。……立会いますよ。

金田は鞄からワクチンの入った注射器のセットをテーブルに出す。
玲子は結の上着を脱がせ、腕をまくる。金田は準備を続ける。

金田　初めにワクチンを打つ。その後、ノクスの血液を投与する。どっちの血を使う？

玲子　私がやるわ。

金田　（結に）腕を出して。

結は腕を出し、金田は注射器を持つ。怖がる結を玲子がなだめる。
金田はワクチンを打つ。

金田　大丈夫だよ。玲子も準備を。採血する。

玲子　その必要ないわ。

玲子は結を立たせ、そっと頬を撫でるかと思うと、急に口づけする。結は驚いて抵抗するが玲子は押さえつけて続ける。二人が離れると、二人とも口の周りに血が滲んでいる。この血のキスで玲子は感染を済ませる。

玲子　じゅうぶんかしら。

征治　（金田に）ごめん、やりたかったらしいんだ。

玲子は結から離れ、ハンカチで口を拭く。
結の呼吸が荒くなる。むせるような咳をしはじめる。三人は結を見守る。

金田　暴れるぞ。ベッドにでも縛り付けとけ。

結は獣のような声を出して苦しみ、暴れだす。
玲子と征治はその様を、産まれた赤子が泣くのを見るように眺める。

床でのた打ち回った結は、玲子に襲いかかって来る。玲子はそれを受け止める。
結は玲子と征治の腕の中でもがき、気を失う。二人は結を抱えて別室へ去る。
金田は道具を鞄に詰め、力なく座る。

■24

関所前。夜。金田と草一がいる。

草一　ノクスの町に依存しない生活を目指す。十年やってきたからな、なんてことねぇよ。
金田　そうか。
草一　全部自前でやるんだ、もうお前らに泥棒呼ばわりされたくねぇ。
金田　どこで？
草一　分からん、とりあえず南だ、沖縄まで行くさ。
金田　沖縄か、そう簡単には会いにいけんな。
草一　来なくていいよ。
金田　嫌われたものだ。

金田はまじまじと草一を見る。

金田　君と再会した時、なんとも言えない感覚に襲われた。時間だ。君の体には時間が刻み込まれている。
草一　うるせぇよ。
金田　同じ時間を生きたはずなのに。
草一　なんだ若さ自慢か？
金田　いや。私は置いてきぼりを食らったように感じたんだ。君だけが時間を進んでいる。
草一　当たり前だ、お前らには夜明けがねぇからな。

金田は笑う。笑い続ける。

草一　笑いすぎだろ。
金田　いや、もっともだと思ってね。
草一　太陽が登って沈んで、一日だ。
金田　こっちには月がある。
草一　月は太陽の光を反射してんだぞ。知ってたか？
金田　……その通り。どの道こっちに勝ち目は無いか。全ての人が泥棒や海賊になったら、社会は成立しない。彼らがいくら英雄的でも、結局は寄生虫だ。
草一　そうだよ、だから俺たちはもうお前らに頼らない。

金田　そうだ。君達は自立ができる。草一、君だけに教えてやるよ。ノクスは出生率を克服していない。全くだ。出生率は上がっている、太陽克服の研究も成果がある、新聞はそう書いてるが、全部希望的観測だ。メディアは本当のことを隠してる。ノクスで生まれる子供は一%。後はキュリオの子供を買っているんだよ。ノクスは自立できない。泥棒は私たちだ。

草一　……。それでも、今はお前達の時代だ。

純子と鉄彦が出てくる。ノクスになった結が会いに来る約束をしている。橋の向こうから森繁も来る。

金田　（時計を見る）もうすぐだと思います。すいませんこんな夜中に。

純子　いえ。

草一は封筒を純子に手渡す。純子はそれを鉄彦に渡す。

草一　お前にやるよ。結が当たった権利だ。好きにしろ。

純子　猶予は一年、良く考えて。

金田　いいのか？

草一　いいんだよ。

結、玲子と征治が来る。玲子と征治は橋の上で待っている。
結は歩いて草一と対峙する。結はノクスの衣装と化粧で以前と比べて洗練された容姿。

草一　大丈夫なのか？

結　うん。大丈夫。ちょっとまだ頭痛いけど。

草一　そうか。

結は草一を珍しそうに見る。

草一　どんな、感じだ？

結　すっきり、って感じかな。何か悩んでたのが馬鹿みたい。

草一　へぇ、そっか。そりゃ良かったな。

結　うん。なんか自由になった。体も、考え方も。この十年、もっと色々出来たなぁって、今になって思うんだよね。私これから勉強して、この村みたいなことが起きないように、何かしなきゃって思うの。なんか今まで、すごい時間を無駄にしてた感じがする。

純子　無駄じゃないと思うよ。

結　でもほら、結局何もしなかったからこうなったわけで、やっぱり自分達で立ち向かって行くことが大事なんだなーって思うの。今思うと不思議なんだけど、何で体が動かなかったんだろう。このままじゃ駄目だって、いつも思ってたのに。だからこれからはね、お父さんや純子さんみたいな人達が、もっと便利に、健康に暮らせるような、そういうことに時間を使おうと思う。私この村の力になる。今なら出来ると思うの。やっぱりさ、このままじゃ駄目だよ。

結の語りには以前は無かった力強さと明確さがある。草一は泣けてくる。

結　あれ？　ちょっと何お父さん、泣いてんの？

草一　あ、うん、はは、なんだろうな。（泣き笑い）

結　なになに、どうしたの？

草一　（泣きながら）いや、はは、嬉しいんだよ、お前が立派になって。はは。

結　やだもう（笑）

草一は泣き崩れる。

結　ちょっと大げさだって。

純子　結ちゃん、ありがとう。ありがとう顔出してくれて。ね、もういいから。今日はもう、いいから。

結　……はい。

結は橋の上で待つ玲子と征治のところにもどる。三人は帰る。
純子は草一をなだめる。

草一　おお、はは、わりぃわりぃ、はは、おお、結行ったか、そっか……

間。
金田は、上着を脱ぎ、草一に土下座をする。

金田　申し訳ない。

草一　……？

金田　申し訳ない。

草一　なんだよ（笑）やめろよ。

金田　申し訳ない。申し訳ない！　申し訳ない！

草一　……いいよ。

金田は体を起こす。

草一　帰れよ。朝になんぞ。

金田はジャケットを脱ぎ捨てネクタイを外し、靴を脱ぎあぐらをかいて座る。

草一　なにしてんだお前？

金田　付き合いなさい、私はここで朝日を見る。

草一　（笑）馬鹿かお前。

金田　君と一緒に見る朝日を最後にしよう。

草一　（笑）こらこらこら。

金田　太陽に背を向けて生きてはいけん。

草一　いいって、やめろよ。（笑）迷惑だよ。

金田　草一、ノクスは病気だ。

草一　……最初からそう言ってる。

純子は笑い出す。金田は地面に倒れ、大の字になる。

草一　じゃあな。帰れよ、頼むから。

草一と純子は帰る。金田は倒れたまま。

鉄彦と森繁はお互いを見る。

鉄彦は封筒を掲げ、破る。執拗に破り、撒き散らす。

二人は満面の笑みを浮かべ、歩み寄る。暗転。――幕。